

四万十川の源流、人はなぜ、源流点を目指すのか =津野町=

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は、四万十川の源流域 津野町から、豊田庄二さんについてお伝えします。



四万十川源流点のある山、不入山（いらすやま）

この日、豊田さんに案内されたのは、地元の人々が四万十川の“裏源流”と呼ぶ北川の流れる地域、不入溪谷だ。川に沿って走る道には、最近降ったばかりの雨が残した幾筋もの“流れ”の痕跡に、岩や石が露わになって、来る者の行く手を阻む。ここには時折、溪流釣りを楽しむ人々が訪れるくらいで、人工物の気配すら感じられない。

“清流”と呼ばれる川は何度も見ていたが、しかし、これほどまでに、勢いよく流れる水の一粒一粒がきらめいて、川底で泳ぐ魚の姿までもがはっきり見えるほどに透き通った水の流れを、私は、本当に久しぶりに見た気がした。

“清流はここに始まる”という言葉が、いかにもふさわしいこの川の一滴が、やがてあの大きな川となっていくのだ。

ここは、四万十川源流域の津野町。ここ“源流の里”津野町では、四万十川は大きく二筋の流れに分かれている。一つは標高 1336m の不入山中腹東斜面を“源流点”とする四万十川本流で、もう一つは、不入山の北面や西面から流れ出て、たくさんの支流を集め、やがて第一支流の栲原川、そして四万十川へと続く、四万十川第二支流の北川の流れた。豊富な水量を誇るこの二つの流れは、アメゴやアユ釣りの絶好のポイントが多いことで知られ、そのシーズンには、多くの釣り客がこの地を訪れる。

郷土に伝わる文化を後世に伝えること

豊田庄二さんは、この春まで津野町役場に勤めていた。現在は、津野町特産の米なすを地域営農でつくる仕事の傍ら、地元の“観光ガイド”を務めたり、“土佐の料理伝承人”（*1）として講演をしたり、“よみがえれ四万十源流の会”（*2）でアメゴの調査にあたりたりと、様々な顔を持つ多忙な日々を送る。

今回は、津野町を知り尽くした、その“ガイド”としての豊田さんに、“源流の町”についての話を伺った。

「津野町では地域を案内するガイドがいて、メンバーはそれぞれに得意分野で活動しています。例えば、歴史に強い人は“史跡ガイド”、森林セラピーロードは特別な資格を持つ“セラピーガイド”が、自分は主に“源流点ガイド”をしています。」この“観光ガイド”の取組は、津野町を含む四万十川流域が、国の重要文化的景観に選定された2009年から、その前からあったものを引き継ぎ発展する形で進められてきた。

「郷土に伝わる文化を後世に残すことの重要性は、特に“重要文化的景観”に選定されてから、地域の人々に理解されるようになったと思います。」

津野町を観光で訪れる人も多くなってきた近ごろは、豊田さんの“ガイド”としての出番も増えてきている。

人はなぜ、“源流点”を目指すのか

四万十川源流の不入山には、私自身、幾度となく訪れている。しかし、いつ行っても、なぜか必ず、“源流点を目指す”誰かしらに出会うのだ。そして、「源流点を目指す旅人は、このところ増加の傾向にある」と、豊田さんは話す。行かれた方も多いと思うが、四万十川源流点に至るには、源流点からは少し下流の“源流の碑”のある場所までは車で登れるが、そこからは、深山幽谷の仙人でも住んでいそうな原生林の中を分け入ること20分だ。けれども、そこを目指したい人は実に多い。

『何故に、人は源流点を目指すのか』、私は前から疑問に思っていたそのことを、豊田さんに尋ねてみた。

「源流点は、読んで字のごとくに川の始まりです。四万十川源流点に案内すると、皆一様に“こんなに小さい流れが始まりなのか”と驚く。それは裏を返せば、“これがやがて大河になる”という驚きでしょう。そこから人は、大切な何かを思い起こすのではないのでしょうか。」

確かに、“源流”の意味を調べてみれば、『① ある川のもととなる水の流れ。水源。』の他に、『② 物事の起こり。始まり。起源。』とある。

人が源流点に惹かれるのは、その物事の“始まり”を見てみたい、振り返ってみたいということのあらわれなのかもしれない。

源流 と 山・川・海 の つながりと

「来年秋に、この津野町で“全国源流サミット”が開催されます。この“サミット”は、全国の源流域の自治体の代表が集まって、源流域に於ける共通した様々な課題を話し合い、その解決策を探ったり、未来に向かって何が出来るかを議論しあったりする大会です。数年前に初めて参加したとき、『四万十川の源流域から来ました！』と自己紹介したら、それだけで会場で、拍手喝采でした。その時、あらためて“四万十川”の知名度を知り、その源流域で暮らすことの責任を感じました。」四万十川が清流であり続けるために、自分達がその源流域を汚してはならない、そういう想いに身が引き締まったのだという。

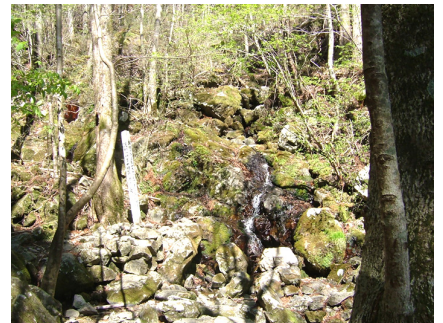
「津野町の北に広がる四国カルスト天狗高原からは、石鎚山や不入山などの周辺の山々が一望できるばかりでなく、そこに立てば、太平洋までが見渡せる。そして、山・川・海につながりがよくわかります。源流点の元の一滴がつながり、やがて大河になって海に注ぐことが、実感としてわかるのです。全ては循環していて、全ての環境が繋がっている。そして山川の大切さが、やがてそれが注ぐ海の大切さに繋がる。そういう“連鎖”を、この源流域からは感じられると思います。」

豊田さんのその話を聞きながら、私はなぜか、ポール・ゴーギャンの有名なあの絵、“われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか”を、思い起こしていた。

そしてそういう、哲学的な問をしてみたくなるような景観が広がる、生まれ育ったこの“源流の里”津野町で、訪れる人々に“我が誇り”の町を案内する豊田さんの姿を、私は、容易に想像してみることができた。

*1…**土佐の料理传承人**とは、高知県内で、郷土料理について卓越した知識・技術等を有し、伝承活動等に取り組んでいる方々で、高知県の食文化を伝承していくとともに、新たな発想と視点により地域食材を活用した高知の食文化を創造する役割を担う方々。

*2…**よみがえれ四万十源流の会**とは、四万十川の源流域である津野町と梶原町をフィールドとして、自然環境調査とその再生、川文化の再生、地域活性化に取り組むグループ。参照：清流通信 163 章 <http://www.shimanto.or.jp/seiryutusin163.htm>



四万十川の“源流点”



後に見えるのは、沈下橋原型“早瀬の一本橋”